



Contents

動物の写真については旭川市旭山動物園より提供いただきました

- 旭山動物園 前園長/北海道大学客員教授 小菅正夫氏インタビュー
「動物から学んだ大切なこと」
- 学長と学生の懇談会
- ようこそ研究室へ：研究室紹介（栄養学科：田邊助教、看護学科：結城教授）
- キャンパスライフ：サークル紹介「名寄市立大学吹奏楽団」・サークル活動報告
- NCU Information：卒業研究発表会・報告会、卒業式



特集：インタビュー
旭山動物園 前園長/北海道大学客員教授
小菅正夫先生

動物から学んだ 大切なこと

園長として就任した当初、入場者数がどん底にあった旭山動物園。それが今では様々なアイデアを導入しながら従来の動物園のイメージを一新させ、日本有数の入場者を誇るまでになりました。獣医師、飼育係として動物と向き合う中で見えてきた、動物社会から学ぶ子育てなどに関して、本学児童学科の学生と教員に語って頂きました。

群れて自分の生き方に目覚める ～オオカミの遠吠え～

傳馬：今日は、旭山動物園前園長の小菅先生をお迎えして、様々なお話を伺いたいと思います。どうぞ宜しくお願いします。

阿部：私たち児童学科の学生は、絵本作家のあべ弘士先生と一緒に旭山動物園に行くという授業があります。開園直後から閉園間際まで、一日中動物園にいたのは初めてでした。私は岩手県出身なので、旭山動物園に行くのも初めてで、とっても楽しくて時間が足りないくらいでした。

小菅：ああそうなの！まあ、実際に動物っていうのは、太陽と一緒に暮らしているから、明け方から活動を始めて、昼はのんびりして、あと夕方また活動して、早朝薄暮型の非常に省エネな生活ですよ。太陽と一緒に目覚めて、暗くなったら寝るという生活をしている。ただ、その中で、真っ暗の中の方がいって選択した動物もいるから、一概には言えないんだけど。基本的には、太陽と共に暮らしているので、動物園が始まってから閉園するまでいるっていうのは、活動を見るには一番いいですよ。どうですか、楽しかったですか？

小野寺：私は、オオカミが夕方一斉に遠吠えするのを見て感動しました。私が以前に見た動物園では、オオカミが2頭くらいしかいないうえに、いつも昼寝をしていて、犬にしか見えませんでした。旭山動物園で、あんなに集団で遠吠えするのを見て、かっこいいなって思いました。

小菅：オオカミってもともと、群れで生活する生き物ですからね。あの遠吠え、何の為にすると思います？一頭でも野生のものはすることはするんだけど...。野生のものが一頭で遠吠えする時はね、仲間に自分はここにいる、皆どこにいるのって聞くために遠吠えします。オオカミは、非常に広く群れを展開するから、突然自分がどこにいるか分からなくなった時に、自分の存在を伝え、仲間の場所を尋ね、声を頼りに合流する。そして、群れが吠えるのは、自分たちの群れがここにいる、それ以外の群れに存在を知らせるためのものです。オオカミは、幅広い地域を自分たちの縄張りにはしているから、自分たちはここにいるから、間違えて入ってきちゃだめだよって、遠吠えをするわけですよ。遠吠えを始めるきっかけや群れの様子を見てみると、遠吠えをするオオカミの意思を感じることが出来るんですね。今度は、そんなことも考えながら見るともっと楽しいですよ。

今野：閉園前のチャイムに反応しているとは思ったけど、そこまでは見ていませんでした。

小菅：実はあれね、僕はある提案をしていたんですよ。どこか他の動物園のオオカミの遠吠えを録って、日によって録音した遠吠えの出る場所を変えると、オオカミたちがその都度、方向を変えて遠吠えをするなんてね。ところが残念ながら、遠吠えをするオオカミが他の動物園にはいない(笑)。
群れで生きて初めて、オオカミはオオカミらしい暮らしが出来るのです。数頭しかいなければ、群れとしてのオオカミの生き方が、眠っているんだよ。ないんじゃないかってね。ちゃんとした群れになると、大きく目が覚める、自分の生き方に。だから本当はそういう生き方を動物にさせなければいけないよね。



務時間に関係なく、いつも動物園のことを考えていました。あべさんは、よく「小菅が園長になった時には、俺たちの動物園が花開くようにしなければいかんだ」と言っていましたね。でもね、今、その当時の説明を見返すと顔が赤くなりますね。もう、誰がこれを読んだってくらい動物は難しいんだってことを書いていましたね。あんなものを読む人は誰もいない。だけど、彼の描く絵は、お客さんも見ていただろうな。結局、彼は悩んだ末に、絵の世界に入っていました。彼とは別々の道を走るけれど、同じ方向に向かってるんだよね。動物の魅力をいかに伝えるか。だからこそ、僕と彼は、今でも仲良しですね。

今野：私たちが関わる保育や幼児教育でも、似たところがありますね。一方的に教え込むことに力を入れるのではなく、いかにそれを子どもたちにやさしく伝えるのか、ソフトやハードといった環境が大切になってきます。

傳馬：幼少期が一番近い、学生さん方の動物園の思い出も聞いてみましょうか。

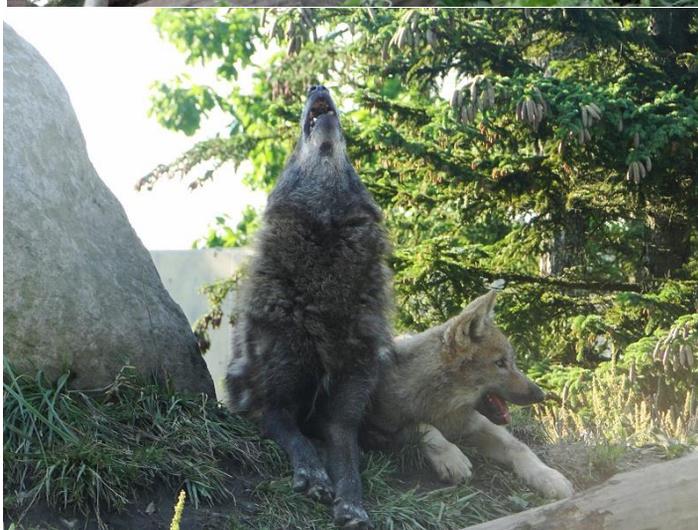
小野寺：幼稚園の頃の動物園の思い出と言えば、遊園地ですね。乗り物がメインで、地元の動物園に遊びに行っていました。

小菅：飼育係はいつも汚い格好をしているけど、春の開園日だけは洗い立ての作業服を着て、お客さんを迎えるという仕来りがありました。開園と同時に子どもたちの歓声がワーッと聞こえてくる。動物園って、子どもの歓声が必要なんだよ。でもね、寂しかったのは、入ってきて真っ直ぐ遊園地に流れて行って、一通り乗り物に乗ってから、動物の方を少し見て...。動物ってこんなにすごいのに、なんで動物見ないんだろうと悔しい思いをする時期が長く続きましたね。

「観る」ことの大切さ

三国：動物園獣医師としての役割というのは色々あると思うのですが、小菅先生は飼育に携わっていたと伺いました。そのなかで、動物の命を繋いでいくというのは大変なことだと思うのですが...

小菅：大変だけど、とっても面白かったですね。何も分からないところから始まるんだもん。旭山動物園は、お金の無い小さな動物園だから、珍しい動物はいないわけですよ。珍しくないって言ったら失礼なんだけど。チンパンジーだってキリンだって珍しいんだから。だけど、日本の動物園は、例え



写真提供：旭川市旭山動物園

動物の魅力を伝えたい

三国：1990年半ば頃、その当時はあまり有名ではなかった旭山動物園が面白いと紹介されて、行ったことがありました。アイヌ語で動物名が表記されていたり、飼育員さんの手書きで絵や説明が記されていたり、温かい印象がありました。

小菅：そうですね。僕が飼育係になってからずっと、あべさん(あべ弘士氏：名寄市立大学特任教授)と、ソフト事業を展開してきました。あべさんとは、同時期に動物園職員になりました。彼と出会って、勤

ばパンダとかそういうものが来る。それに対する研究をしようという動物園ではない。大体、動物園に来る海外の動物っていうのは、たいてい繁殖実績が既にある、論文もあり、飼育の仕方もわかっている。ところが、実際僕らが興味を持っている、北海道の動物っていうのは、なんにも分かっていないんだよ。これを繁殖させようとしても、なかなか上手くいかないんだ。僕が獣医師としての仕事をしながら、初めてやった研究は、血液検査。当時は血液検査なんていうのも全くできてない時代でした。当時ようやく動物園で血液データを採ろうという動きが出てきて、採血して測定して、地道にデータを取っていました。そういうことを出来るということが、とても嬉しかったですよ。

とにかく片っ端から捕まえては、採血していたんですよ。だから、動物園の中での私のあだ名は吸血鬼でした(笑)。あいつまた血抜くのかよ。でも、普段の正常値が分かっていないと異常はつかめない。正常値が変化していくのが病気ですよ。そうやって、とにかく動物を良く観察するということをしていました。

今野：あべ先生が授業でも話していました。観察する、「観る」ということは大事だと。保育の中でもそれは非常に大切ですね。ただ「可愛い」とか言っているのではなくて、分析的に見ていくうちに命そのものがかわいくなるっていうか。

小菅：観察の観で「観る」。ただ一見するの見るでは絶対ダメ。この「観る」というのはこちら側にも主体があって、向こうの主体も認めることでしょ。だから、私たちの仕事は、同じことをずっと観続ける事でした。ちょっとした変化、これは五感で感じる。目だけで見るとは、違う感覚。自分の持っている感覚を全て使い、生き物の発する様々な情報を観察する。予兆みたいなものも含めて。それを全部含めて「観る」であって、目だけで見るとはまるで違う。そして、とても大切なことだと思いますね。

今野：相手はものを言わない動物であったり、子どもであったり、だからこうなんだと、こちらの側だけで勝手に決めつけているうちはダメですよ。

小菅：あべさんも同じこと言っていました、動物は平気で嘘つくんだ。大変なのになんでもない顔したりね。僕とあべさんはよく、「弱ったタヌキは目でわかる」と話していました。目はいろんなものが反映されます。チンパンジーなんかでも発熱時の目は全く違うし、イライラしてる時の目もすぐに分かる。

今野：言葉がある分、人間は言葉のコミュニケーションに頼ってしまいますね。

小菅：動物園で仕事をしていると、人間と動物とではお互いに言葉が通じないから、それ以外の情報を得ようとするね。その意識がよく観察することにつながるのだと思います。言葉が使えたとそれだけで、安心しちゃいますよね。「大丈夫？」って言葉をかければ、それで終わった気になってしまいますよね。

傳馬：保育学生が実習に行った時に、三歳未満児クラスのような言葉によるコミュニケーションが十分に図れない子どもたちを目の前にして、苦手意識を感じることがあります。会話ができないから難しいと思いつているようです。今のお話のように、相手を知ろうとする意識があれば、あらゆる情報から「観る」ということをしようと思いますよね。

小菅：そうなんです。最初から会話が通じないと諦めるのではなく、五感を使って情報を得ようとするわけでしょ。考えてみたら、動物の世界全部そうなんだよね。同種だけじゃなくて異種の間でも意思が通じる。例えば、シカとオオカミ、それからクマとシカ。言葉なんて無いんだけど、ちゃんとコミュニケーションを取っています。それは、言葉ではないコミュニケーションの方法が当たり前の世界なんです。人間は、言葉というものを発明し発達させてきました。チンパンジーだと、50ぐらいの言葉でコミュニケーションを取ることが出来るとも言われています。最近の研究でもっと扱える言葉の数が増えているかもしれないけれど、人はそんなものではないですよ。抽象的な言葉も含めば、実に複雑ですよ。だけどそれは、心と心を繋いでる訳では無いんですよ。そういう言葉というのは、大脳皮質と大脳皮質のやりとりなので、心を含む情報のやりとりっていうのは、言葉だけでは通じないはずなんです。だって、好きだ好きだ好きだって言っても分かってもらえないもの。だけど、言葉以外のところでみんなそれを感じるわけでしょ。その経験は、幼少期に育つものだと思います。

傳馬：まさに保育の重要性を指摘していただき、気が引き締まる思いです。



写真提供：旭川市旭山動物園



子どもたちの広がる可能性

小菅：チンパンジーの話で、ナッツ割りという行動があります。ナッツ割りは、こちらの森でやっていますが、あっちの森ではやっていないということがあつた。チンパンジーのメスは群れの移動が自由なので、あるメスが、隣の群れに入ってしまったとき、その群れではナッツ割りをするチンパンジーがいなかった。だから沢山のナッツが落ちていても、誰も食べることはなかった。移動したそのメスは、ナッツを割って食べ放題になった。さあ、問題です。そのナッツ割りを真似して、食べ始めたのは、どういうチンパンジーだったのでしょうか。

阿部：子ども...

小菅：正解です！大人のチンパンジーは真似できなかった。やっぱり何でも取り入れる柔軟性を持っているのは、子どもなんだよ。子どもから子どもへの水平伝播はするけど、大人から大人は水平伝播しない。親から子どもといった垂直伝播はする。何にでも興味を持って、走り回っているような子どもの方が、ゆくゆく発想豊かな子どもに育つかもしれない。それを、手足をもぎ取るように、ここでじっとしてなさいという保育が良いのかというのは、考えないといけないうると思うけどね。

今野：保育所や幼稚園の様子だけではなく、親という姿、子ども同士の表情など、子どもの色々な様子を観ることも大事だと思います。名寄の学生たちも、ボランティアなどで地域に出っていくと、様々な学びを得ることが出来ていますね。

三国：先ほど、群れてこそオオカミらしい生き方が目覚めるとの話がありました。人間も動物の一つと考えると、人間らしい生き方って、本来どうあるべきなんだろう...私たちは見失ってきたのかもしれないですね。でも、そのことに気づき始めているような気がします。



社会で子どもを育てる

～「社会保育学科」の理念～

三国：日本の子育てを考えても、つい最近まで、生みの親だけではなく名付け親とか帯親、いろんな親がいたわけで、そういう社会みんなで子どもを育てていくということを取り戻したい。単に昔に逆戻りという訳ではなく、現代の社会に応じた子育てを目指して、私たちは社会保育学科を立ち上げます。

小菅：それは重要なことですね。社会で子育てをしていくという視点。

今野：特に都会では個別で生きる社会が当たり前になっていますが、地域の人たちを巻き込みながら、その中に保育園や幼稚園、認定こども園が存在して、新たな役割も果たさざるを得ない。そのためには、子どもの育つ家庭、つまり保護者支援でも保育者は重要な役割を担うと思います。

三国：また、その家庭が生活する社会全体や保育・子育てを取り巻く政策的な部分にも理解を深め、働きかけていくことができるような人材を育成していきたいというのが、新しい社会保育学科のコンセプトです。

小菅：子育てが最も楽しいことなんですからね。生きていくうえで一番楽しいのは、子どもを育てることです。それが上手いできない社会は、悲しいことです。子育て経験なく、自分が棺桶に入るときにサヨナラいえる人がいないのは寂しいことです。

今野：社会の中で関わり合いがあれば血縁関係のない子どもであっても、ちゃんとサヨナラ言えますよね。今の時代だから、必ずしも子どもが生まれる夫婦ばかりではないということもありますし。

小菅：血縁関係のない子育ては、動物の世界では既にみられることです。アフリカの方のある鳥の話ですが、一つの巣の中にいる雛鳥を観察していた。その中で、雛から大人になってもペアにならない個体に着目した。するとその個体は、自分の子どもではない他の子どもの雛鳥へ餌を運ぶヘルパーになったんだよね。そこで考察されたことは、これが遺伝子なんだと。まずは、自分の遺伝子を残す。その次にやることは自分の最も近い遺伝子を残す。それが生き物だって。それを見たときに、めちゃくちゃ感動しましたね。人間に近いと言われるチンパンジーは、子どもが3歳になるまで溺愛です。野生動物は、100%子どものために生きていないと、子どもが育たないんだよ。でも、授乳が終わる3歳ころになると徐々に親子関係を薄くしていきます。そして、次の子どもが生まれると親にかまってもらえないから、少しずつ親か



ら離れ、子ども同士の群れに入っていく。でもね、この時、その子どもたちを見ているのは、その母親のお母さんやお姉ちゃんなんです。つい最近ですよ。日本なんて三世代同居という素晴らしい仕組みを作って、子どもは皆で育てましょう。三世代同居どころかね、親戚一同みんな。私の家もそうでした。そうやって暮らして、お互いに子育ての融通をしながら、しかも、隣のおばあちゃんの手まで借りて…。地域で子育てをすという文化を私たちは、たった50～60年ぐらいで、崩壊させてしまった。その結果として、出産した親にだけ、ものすごく負担がかかるようになった。子育てを終えた人たちを「いらない」と言うんじゃないで、積極的に子育てに参加してもらおうとも一つだと思いますよ。

傳馬：今日は小菅先生から、本当にいいお話をたくさんお聞きしました。それでは、学生さんの方から今日の感想を聞いてみましょう。

阿部：最後にお話し下さった「生きている中で子育てが一番楽しい」、そう思えるようになりたいなと思いました。そして保育者として、「子育てが楽しい」と思えるような、社会とか地域にしていきたい。そのためには、動物からも教えられることが沢山ありますし、他にも学ぶべきことがまだまだあると感じました。

小野寺：お話にもあった様々な環境づくりは、大切だと思います。そのためには何よりも「観る」ことが改め大切だと思いました。私は、保育者を目指しています。まずは目の前の子ども一人ひとりをしっかり観ていきたいです。しっかりと向き合うことの大切さを今回学ばせて頂いたので、来週から始まる実習でも、出会う子どもたちとしっかりと関わってみたいと思います。

傳馬：では、三国先生から新学科に向けてのコメントを。

三国：子育てとか子どもの教育は、親だけのことではなく、大人全体の問題だと思います。本来保育というものは社会で行っていくことを前提としていますが、あえて新しい学科名を「社会保育」としました。いずれ「社会」という言葉をつけなくとも、「保育」という言葉だけで、そうしたことを指すような社会になっていけるよう頑張りたいと思います。

学生時代に自由に考え、議論する

傳馬：それでは最後に、これからの社会を担っていく学生たちにメッセージを頂けますでしょうか。

小菅：学生時代っていうのは、自由にものを考えることができます。その時に、それはダメだということを、誰からも言われる必要がない時代なんです。社会に入ると社会の一員として生きていかなければいけない。そうすると社会の進む方向に乗らなければいけないので、何でもいいということではなくなる。学生時代というのは、思考の幅と深さを養う時期であり、人生にとってこんなに大切な時間はない。自由に考えて、自由に議論して、そして、自分を、観続けることの大切さを是非養ってほしいと思います。社会に出ると、自分の思いだけでは、絶対に物事はうまくいかない。でも、その社会を自分が思っている社会に近づけることは出来ると思う。その時、学生時代に得た思考がエネルギーの源になってきます。そのエネルギーで自分たちが生きている社会をどういう方向へ進めていくのか、自分の問題として考えてほしい。言われたからやるのではなくて、自分がここに存在しているんだと、しっかり見据えながら。ただし、社会の一員であるということは絶対に見失ってはいけない。自分の進みたい方向とは違うなら、そこへ執着する必要なんてないんだ。自分の進むべき方向へ行けるような、環境を自ら求めていくことが大事だと思います。

傳馬：本日は誠にありがとうございました。

PROFILE

小菅正夫（旭川市旭山動物園前園長 / 北海道大学客員教授）

1973年 北海道大学獣医学部卒業後、獣医師・飼育係として旭川市旭山動物園に勤め始める。飼育係長・副園長などを歴任し、1995年には園長に就任する。就任当初、当時の旭山動物園は入場者数がどん底にあり、閉園の危機にあった。それを、これまで描いてきた理想の動物園構想を元に、水中トンネルでペンギンの遊泳を見せる「ペンギん館」など、斬新なアイデアを導入することで従来の動物園のイメージを一新。その結果、月間入園者数日本一を達成するなど、日本最北の小さな動物園を日本有数の入園者を誇る動物園にまで育て上げた。

著書に『「旭山動物園」革命』、『動物たちの子育て』、『動物から学んだ人生で大切な事』など。



対談参加者（写真左から）

傳馬淳一郎：児童学科講師、保育学が専門

三国和子：短期大学部長・児童学科教授
音楽科教育、保育音楽が専門

阿部あかり：児童学科2年
岩手県立花巻北高等学校出身

小菅正夫先生

小野寺 望：児童学科2年
北海高等学校出身

今野道裕：児童学科長/児童学科教授
児童文化が専門

未来へリードする

新しい保育者になる



名寄市立大学
保健福祉学部
社会保育学科(仮称)

2016年4月開設予定
学科設置届出予定

詳細についてはホームページ等をご覧ください

学長と学生の懇談会

学長と各学科の学生との懇談会を開きました。学長の大学教育や大学運営に関する考え方を伺うことができました。また、人生の先輩としてのアドバイスもいただきました。学生からは、改善して欲しい要望もでした。これらの要望は、これからの大学作りの大きなヒントになるかもしれません。



名寄に来たのは「天命」。名寄は住みよい町だと思います。

徳永（児童）：学長のご出身はどこですか？

青木学長：出身は、愛知県豊明市です。名古屋の近くに位置していて、桶狭間の戦いに関する史跡があるところです。

中橋（社会福祉）：学長が名寄市立大学に来た理由を教えてください。

青木学長：北海道大学の学部長をやっていたときに本学の学長の話をしていただきました。最初は札幌から遠いなと思いましたが、自分の人生を決めるときに「これは天命だ」と思いながら進んできたので、名寄市立大学に行くことに自分の人生の流れがあると感じて来ました。



児童学科：徳永彩佳さん

城生（社会福祉）：学長が名寄で好きなところや魅力を感じる場所があったら教えてください。

青木学長：名寄市の好きなところは、自然が豊かなところです。私は、スキーが好きなので、スキー場が近いことも魅力です。ここから車で10分くらいですからね。また、名寄市は、東洋経済新聞社が出している都市別ランキングでは、北海道の中で1-3番に位置しています。これは、名寄市に最低限の都市機能が備わっていることを示していて、「住み良さ」という意味では良い町です。ただ、町全体の景観はイマイチだと思っています。名寄の「住み良さ」に富良野のような景観が加わったら、本当に最高だだと思います。

城生（社会福祉）：学長は普段どんな仕事をされているのでしょうか？

青木学長：普段は、学長としての業務以外に、1年生の社会福祉学科の講義を担当しています。授業を行うことは、学長の業務とは違う適度な緊張感があるので、良いですね。学生に自分の考えを語るという情熱を忘れない機会になっています。



社会福祉学科：城生舞さん（左）、中橋希さん（中央）

学生時代は悩みながら選択することが大切

佐々木(看護)：学長は、私たちが目指している専門性やそこに求められる人間性を高めるために、どのような学生生活を送ることが大切だとお考えですか？



看護学科：佐々木菜穂さん

青木学長：なかなか難しい質問ですね。私は専門職養成の大学に行っていないので、皆さんと状況は異なります。私が入った農学部は、皆さんの専門職養成のように決まった道の上を進むような学部ではないので、入学からしばらくの間は将来的なことを決められずにいました。でも、大学3年生くらいに、この先について考えたときに、いろいろな本を読み始め、徐々に自分の方向性が見えてきました。最終的に選んだのは、高校のときに行きたいと思っていた文系の道で、農業経済学を学んでいくことになりました。

私の大学生活は、自分の方向性を考える生活だったといえると思います。方向性という点では、私は、皆さんがうらやましく見えます。すでに、専門職という道に進むのがある程度決まっているのですから。でも、たくさん悩んだ経験から考えると、正直なところ、そんなに早く決めて大丈夫なの？という心配もあります。その理由は、自分のやりたいことや好きなことは、なかなか自分でも分からないと思うからです。若いときは経験が少ないですよ、少ない経験の中で人生を決めるような判断していくというのは、大変ですよ。いろいろな経験をする、「こんなおもしろいこともあるのか」と気が付くときもあります。自分ができることもいろいろ考えることができます。そう考えると、大学生活を含めてこれから先も、いろいろ悩みながら選択していくということが大切なのではないかと思います。

名寄という地域をフィールドにした教育活動をしたい

寺島(栄養)：学長は、名寄市立大学が行っている、地域と関わる講義についてどのようにお考えですか。



栄養学科：寺島沙恵さん

青木学長：地域に関わる講義を本学の教員が学生の満足につながるほどできているのか、逆に学生たちに聞きたいです。本学でもフィールドグループワークという授業がありますが、私の北大の経験でお話すると、例えば調査実習の授業では「今年は障害児の親に関する調査をする」というようにテーマを決めて、学生が調査に行きます。また、生活に困っている世帯を調査して、学生を連れて行き、学生が話を聞いてくるような授業をしました。このような授業をやると学生の授業に対する姿勢や意識が凄く変わります。だから、私は、そのような形のフィールドグループワークを学生にやらせたいと考えています。

例えば食生活に関することを考えたときに、貧しい家庭ではジャンクフードが多くなる傾向があり、そのような食生活は将来的に寿命などに関わると考えられます。食べ物のことだけでも、たくさん問題点が出てくる。おもしろい部分がたくさんある。そういうフィールドを勉強の対象として名寄という地域に設定し、指導し、教育することを本学の教員にやってほしいと考えています。

名寄市における学生の存在は大きい

佐々木(看護)：私たち学生や名寄市立大学は地域の方々からどのように思われているのでしょうか？



海老健太さん(左)、佐々木菜穂さん(右)

青木学長：先ほどのフィールドグループワークの話ではないですが、そのような疑問は、是非学生が外に出かけて行って、市民の方からアンケートを取り、まとめてみてほしいと思います。そのような調査は、卒業論文の価値があるくらいです。大学や学生がどのように思われているのかというと、大学が存在することで名寄に若い人が住むことになり、地域の活性化につながっています。市民とは、直接的なふれあいが少なくても、名寄市における大学や学生の存在感は大きいと思いますよ。

<対談参加者>

青木紀学長：社会福祉学科教授・京都大学大学院・農学博士・教育福祉論が専門
栄養学科：加藤万里子(3年・新居浜東高校・愛媛県)、寺島沙恵(3年・士別翔雲高校・北海道)
看護学科：海老健太(3年・千歳高校・北海道)、佐々木菜穂(3年・黒沢尻北高校・岩手県)
社会福祉学科：中橋希(3年・広島国際学院高校・広島県)、城生舞(3年・千歳高校・北海道)
児童学科：徳永彩佳(2年・豊北高校・山口県)、松田莉奈(1年・北見柏陽高校・北海道)

子どものことを考え「保育」をリードできる人材の育成

海老（看護）：名寄市立大学では、学部再編強化を目指して児童学科の4年制大学化をするようですが、そのメリットやデメリットを教えてください。

青木学長：順調にいけば、28年度の4月から社会保育学科という学科が設置されます。これまで、その設置の必要性について、学生の皆さんに話す機会がありませんでした。この機会にしっかりお話したいと思います。

児童学科の4年制大学化については、児童学科の要望や、保健福祉学部の4年制大学化と同時に本学科を4年制大学化できなかったという歴史もありました。このことから、学長として一つの課題ととらえて就任して以来、議論を続けてきました。

4年制大学化のメリットとしては、まず、受験者の偏差値が上がり、大学入試の倍率も上がると考えています。学長は経営者の面もあるので、偏差値が上がり、倍率も上がるよことは重要だと考えています。しかし、このような変化は、これまでのような短期大学受験を目指していた高校生にとっては、本学を目指すことができなくなるという面ももたらします。

現在、国の方針では保育園や幼稚園教諭は短期大学卒業でも十分であるということになっていますが、私は、それでは日本はだめになってしまうと思っています。現在、日本は、就学前の子供の教育や保育にかかるお金が非常に少ない状態になっています。これは、子供の人生は生まれた家の財政的な状況や文化環境に依存することを示しています。一方、北欧の国では、就学前の教育にたくさん投資が行われ、子供は平等なスタートが切れるシステムになっています。現在、どの先進国も競争の中で優秀な力を持つ人材を育てようとしたときに、小さいときから質の高い保育や教育を受ける機会を与えて、平等なスタートラインに立たせ、その後、それぞれが切磋琢磨するというシステムが良いと考えています。そういう形の投資が世界的な流れになっています。今後日本がそのような政策を行っていくと考えると、これからは就学前に教育する人材の質が大きな意味を持つてくると私は考えています。

社会保育学科の就職先などは、卒業時に問題となってきます。短大部の児童学科は、現時点で公務員保育士の比率が非常に高い状態です。それは給与が安定しているという部分が大きいと思います。公的な職に就職する方法について、大学としてもっと追求していく必要があると思います。公的な職にも含まれますが、4年制大学化によって児童相談所などの分野も就職する領域として入ってくると思います。私は、子どもや保育に関わる現場で働きながら、日本の子供の将来を常に考えられるような人材を輩出したいと考えています。

もう少し加えると、これから設置される予定の社会保育学科は、国公立ということ考えたときに北海道と東北では、唯一です。社会保育学科を軌道に乗せれば、名寄市立大学は東北や北海道の保育界のトップを目指せるかもしれないと思っています。大学の地位向上は、現場における地位向上、つまり保育園や幼稚園でも園長などのまとめる役目を果たす人材になれることを示していると思います。そのような考えから、社会保育学科では、子供の保育や教育の分野をリードしていける人材を養成したいと思っています。

4年制大学化で学生生活の充実を

松田（児童）：児童学科のカリキュラムと社会保育学科のカリキュラムでは、時間的なゆとりには違いが出ますか？

青木学長：短大部は2年間で70単位以上ですね。4年制大学化で128単位になります。現在の短期大学部は、詰め込みになっています。これに対して、4年制大学化をすれば、いろいろなことを考えられる時間的余裕がでてくると思います。今よりも、サークル活動やアルバイトに時間を使うこともできると思います。大学生活が、2年間で4年間では全然違います。私は、すべての学生に4年間学んでほしいと思っています。

集中講義が多いのは名寄市の地理的弱点

中橋（社会福祉）：名寄市立大学は集中講義が多いと思います。今後改善されますか？

青木学長：集中講義が多いことは、よくない状況だと思っています。でも、正直なところ、これが名寄の地理的に不利な状況を示していると思います。大都市ならば、非常勤講師が毎週同じ曜日に開講することが可能ですが、名寄ではそうならない。だから集中講義で対応せざるを得ない状況になっています。今後の改善策としては、本学の教員にもう少しほかの科目も受け持ってもらうなどの対応を考えなくてはならないかもしれません。または、教員数を増やすような対応を考えていきたいと思っています。



看護学科：海老健太さん



児童学科：松田莉奈さん



社会福祉学科：中橋希さん

学科を超えた学生同士の積極的な交流に期待

松田（児童）：新設予定の社会保育学科は、栄養・看護・社会福祉学科とどのように交流していくことになりますか？

青木学長：現在は短期大学部と保健福祉学部と言うことで、組織的な違い、そして学生の感覚や先生の感覚も違うので児童学科と他の三学科は授業などでの交流が難しい状況にあると思います。しかし、4年制大学化すれば、社会保育学科と他学科は対等な関係になるので、交流は深くなると思います。このような交流の中で、お互いに切磋琢磨しながら発展し、4学科全体ですばらしい大学を作ってほしいと思っています。

もちろん学生同士は、学術領域などに関係なく交流してほしいと思います。学生間の交流に関しては、教員が関与する問題ではありません。学生同士で積極的にやってほしいです。

教育環境として図書館の充実が大切

中橋（社会福祉）：大学の図書館で必要な文献が手に取れないことがあります。これから何か改善する取り組みはありますか？

青木学長：このような問題は、はっきり言って教員の責任が大きいと思います。私も、何か本を書こうかなと思って、社会福祉や看護などたくさんの本を読んでいるところです。しかし、読みたいと思った瞬間から、この大学に読みたい雑誌や本がないことに気がつきました。このような状況は、教員がもっと研究をしていく姿勢を持てば改善されるのではないかと考えています。

もちろん、決して、教員が研究をしていないというわけではありません。本学の教員に占める文部科学省の科学研究費採択数は、年々増加しています。また、大学教育も一生懸命です。しかし、大学の教員である以上、教育と研究をすることは必要なことです。その両立をしていってほしいと思います。

文献の不足などに関しては、学生が直接図書館にリクエストすることも重要です。あとは、自分が関わりのある教員を通じて本の購入希望を出すことも必要だと思います。本学の図書館は、学生の希望を叶えるために一生懸命動いてくれますし、そのための予算も確保しています。学生の皆さんは、欲しいときに本などがなくて「この図書館はだめ」という風に考えてしまうかもしれません。そうではなくて、積極的にリクエストしてください。

学長としては、教育環境はもっと整えないといけないと常々思っています。特に、本学には「図書館」という建物がないですね。図書館は大学のシンボルなので、それを作りたいと思って、皆さんは卒業した後ですが、これから入学する1年生が3年生になる頃に使用できるタイミングで、大学図書館が建つことになりました。これができれば、名寄市立大学は大学らしい風貌になります。私は、学生が親を名寄に連れてきたときに、これが私たちの大学と自慢できるようなものを作りたいと思っています。それが少しずつ実現しています。また、私が社会福祉学科の講義を通じて感じることは、名寄市立大学の学生にも北海道大学の学生並みに優秀な学生がいるということです。もちろんもっと勉強が必要な学生がいることも事実ですが、教育水準としては、やはりそれらの優秀な学生が十分に学べる環境を整えてあげたいと思っています。そのためにも、図書館の建設は重要だと考えています。

悩んでいるときに本などから受ける影響は大きい

加藤（栄養）：青木学長がこれまでに読んだ本で人生を変えたと思うような本はありますか？

青木学長：大学生3年の秋ぐらいから、自分の進路に迷って、いろいろな本を読みました。私が若い頃には「左寄りの考え方」のようなものが強くあり、学生の頃にはだいたいそういうものに染まる時代でした。高校の頃から歴史をやりたいと思っていたので、その中でマルクスの書いた「共産党宣言」という本に出会いました。本の書き出しに、「これまでの歴史は、すべて階級闘争の歴史である」という一文があり、労働者と資本家、農民と地主などの対立の中で歴史が動いているという考え方が書いてありました。それが進歩につながるという考え方です。「なるほど」と思いました。これで自分の価値観が変わりました。

難しい本だから良いとかではなくて、悩んでいるときには一言でなるほどと思うことがあります。それが本の時もあるし、映画の時もある。雑誌の一行かもしれない。自分が悩んでいるときと一致するものに影響を受けるものだと思います。



寺島（栄養）：交通機関が不便だと感じるのですが、今後何か対策を立てることはありますか？

青木学長：これはJRなどの問題でもありますね。名寄の人口が増えれば便数の増加などが行われるかもしれませんが、人口が増えないと難しいと思います。

城生（社会福祉）：大学の構造上、新館で講義などある場合、本館にある食堂に行くために、外を歩く必要があることはどう思われますか？

青木学長：それは、北海道大学でも同じです。そのこと自体は、問題ではないと思いますよ。もちろん、新館と本館をつなぐことも考えましたけどね。

学生の母校の高校へのPRが大学の一番の広報活動

寺島（栄養）：私は隣町の士別市の出身なので、周辺地域の高校へどのようなアピールをしているのか伺いたいのですが。

青木学長：入試広報委員会があって、広報活動がんばってくれています。寺島さんの出身校の士別翔雲高校には、高校に説明会に伺っています。大学としては、是非皆さんに夏休みなどを利用して地元に戻ったときに、母校を訪問して本学のアピールをしてほしいと思っています。学長がこう言っていたとか、大学の雰囲気はこんな感じだとか、皆さんの声で伝えることが一番高校側に伝わりやすいと思っています。

城生（社会福祉）：もし学長が名寄市立大学をアピールするとしたら、どのようにアピールしますか？

青木学長：本学は、ケアの未来を開くというキャッチフレーズを持っています。各学科の卒業生は、他人の援助をするケアのプロフェッショナルになります。このような職業は、裏方の側面も大きいですが、ケア抜きにしては人々の生活はなり立たないと思います。そのような仕事に就職し、その職業の社会的評価を高めていけるような、高い意識を持った専門職を育てたいと思っています。

私は、本学が教育や研究などでケアの事を考えていく意義は、とてつもなく大きいと思います。ケアに対する重要度は、今後はより高まって行くと思いますし、ケアを大事にしないと国家は破綻すると思っています。ケアの事をより深く考えるために、本学には4つの学科があります。そのような大学の方針を伝えてもらえればと思います。

実習に関する費用負担軽減に対する努力に理解を

徳永（児童）：在学生の道外出身者割合が高いですが、道外出身者が多くなってきていることについて学長としてはいかがお考えですか？

青木学長：道外出身者が多いのは、本学の評判が上がっていて、知名度が上がっていると考えています。増えることは歓迎です。

徳永（児童）：私は出身が山口県なので実習などで遠方に行くときの支援費について、自分としてはやや足りないと感じるときがあります。道外出身者の人は、そのような思いがあると思いますが、今後改善されますか？

青木学長：今は、地域によって旅費には差があります。たとえば、道内であれば、交通費は5000円、東北であれば10000円などです。宿泊費に関しては一泊の上限5000円で支給しています。実習する場所によっては、全く負担なく実習に行き帰ってこられる場所もあれば、10000円ほどまたはもう少し足が出る場合があるのも事実です。ただ、学生の実習に関わる費用負担を軽減しようとしていることは理解してほしいと思います。もう少し、負担が減るようにシステムを考えなくてはならないかもしれませんね。

中橋（社会福祉）：名寄市立大学は地域枠適用外の地方から来ている学生の入学金が高いですが、学費は今後も変わらないのですか？

青木学長：これに関しては前から市に伝えてきましたが、大学運営に関する決まり事を変えるためには議会の同意が必要になります。ただ、在学生がそのように思っていることを市長などに伝えて、今後の話し合いをさらにしていきたいと思っています。



栄養学科：寺島沙恵さん



社会福祉学科：城生舞さん



児童学科：徳永彩佳さん

主張できる人材に

加藤（栄養）：学生に「こうなってほしい」という希望や社会に出るにあたって身につけてほしい力などありましたら教えてください。



栄養学科：加藤万里子さん

青木学長：学生は、卒業後にどこかの組織に属します、そこで専門職として問われるのは、専門職としての責任です。自分の責任を自覚して、その組織で発言できる専門職になれるかどうかが重要だと思っています。自分の思っていることを発言しないと責任を果たしたとは言えません。黙ってはいけません。これはどの職種でも同じです。しっかりと、自己を主張することができる人物になる事が大切です。これはとても難しいですが、やってほしいと思います。

海老（看護）：組織をまとめる上で苦労したことや工夫していることを教えてください。

青木学長：今時の人は2-3回お酒を飲み行こうと誘って断られると、めげてしまって誘わなくなると思います。それではみんなが孤独に生きることになるかもしれない。それはよくないと思っています。だから、意識的にいろいろ誘うようにしています。また、大学の全教員と面接などもやっています。

佐々木（看護）：これまでの経験で、私たちが目指す職種の連携の必要性を感じたことがありますか？

青木学長：よくあります。まず、自分が病気になったときですね。また、社会福祉分野でホームレスの人に関わると、ホームレスの方々は単純に仕事を失っているわけではなくて、病気はもちろん、知的障害などを持っているケースも存在します。そのような立場の人にどのような対処をするのかと考えたときに、連携がないと対処できないことがわかります。虐待などの例でも同じだと思います。やはりその根底には、親が精神的な問題を持っていることや貧困に苦しんでいる例が多々あります

しかし、社会の組織は縦割りになっています。これが連携を阻む問題になっています。一度その組織に入れば、その組織の考え方に縛られてしまうために、連携が難しくなっていますね。そのような社会の仕組みを知った上で、自分の専門分野から見たときに、連携ということも考えながら主張していく事が大切だと思います。そのような主張をしながら、組織をリード、あるいは積極的に協働するような人物になっていくことが大切です。そのような専門職になってほしいと思います。

常に考え鋭敏な感覚を持つ

松田（児童）：保育者が子供の貧困問題に対して行動できることはあるのでしょうか？

青木学長：何ができるかという、貧困に対して保育士ができることは少ないと思います。ただ、今の子供の状況を貧困や不平等などの問題と関連づけながら理解しておくことは大切だと思います。あるいは、そのような問題には虐待などが関係していることも多いので、そのような事に敏感な保育士であることは大切だと思います。そのような事を常に考えられる、鋭敏な感覚を持った保育士になって欲しいと思います。

鈍気・根気で勝負しながら、自分の可能性を探求して欲しい

加藤（栄養）：今日はたくさんのお話をありがとうございました。これからの学生生活の糧にしたいので、最後に学長の座右の銘を教えてください。

青木学長：大学院に行って2-3年して、仕事がないことに直面しました。そんなときにある教授の研究室を訪ねた際に、その研究室の壁に「鈍気・根気」と書いてあるのを見ました。「なるほど、これだ」と思いました。頭のいい研究者は別として、研究者は根気と鈍気で勝負するのがいいんだなと思いました。根気と鈍気で勝負していれば、いずれは実を結ぶと思いました。

もう一つは、「人生はそこに流れがあったら乗る」という言葉です。いろいろ難しいことがあってもこれが天命だとおもって乗る、そうすると道が開けてくるものです。

どこに自分の才能があるのか容易にはわかりません。いろいろなことをやってみると、それをやれることがわかります。つまり、自分の才能がどれほどあるのかは自分ではわかりません。だから私は学長として皆さんには教育上のチャンスをたくさん平等に与えてあげたいと思っています。チャンスの質も最高度のものを与え、皆さんの才能を開かせることを心がけていきたいと思っています。

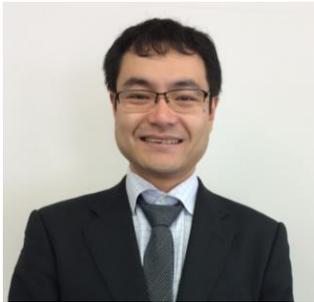
ようこそ研究室へ！！

名寄市立大学の研究最前線を紹介します。

食物繊維の発酵によって作られた水素ガスの栄養学的な役割の解明

保健福祉学部 栄養学科

助教
田邊 宏基



研究の背景

H₂ガスの吸入でラット脳虚血-再灌流時の酸化ストレスが軽減し、脳梗塞巣が減少することをOhsawaらが明らかにして以降、生体内H₂の生理機能が多数報告され、注目を集めています。私達は食物繊維の摂取によって門脈H₂濃度がH₂ガス吸入時の血中濃度に匹敵することをラットで確認しました。このようなラットで肝虚血-再灌流酸化障害が軽減されることも明らかにしました。H₂の直接投与にくらべ、食物繊維によるH₂の供給は低コストで、体内の高H₂濃度を長時間維持できます。利用者に負担をかけずに酸化障害を抑制できる点は大変有利ですが、食物繊維-水素-生体の関係はこれまで殆ど研究されていません。そのため、食物繊維の発酵によって作られたH₂ガスの栄養学的な役割の解明が望まれています。

研究の成果

現在、当研究室では、ラットに高アミローススターチ(HAS)やフラクトオリゴ糖(FOS)などの大腸発酵でH₂を作る基質を摂取させ、検討を重ねています。これまでにHAS摂取による高H₂産生状態は2週間で定常になること、発酵基質が充分量存在すれば昼夜のH₂産生量に変化がないことを明らかにしてきました。また、図1はラットに对照(C)またはHAS食を2週間摂取させたときの血液および組織中H₂濃度を示しています。HAS食群の門脈血、腎周囲脂肪および精巣周囲脂肪中のH₂濃度はC食群に比べ有意に高く、肝臓、精巣、肺で高い傾向を示しました。大腸内で生成したH₂の全てが門脈経路による呼吸や放屁から単純に排出されるだけではなく、広く腹腔内に拡散されることを明らかにしました。

今後の展望

本研究により、生体内に吸収されたH₂は脂肪組織に選択的に取り込まれている可能性が示唆されました。脂肪組織にH₂の還元力を供給できれば、生活習慣病発症・増悪の一因と考えられている肥満時の脂肪組織の炎症を軽減できるかもしれません(図2)。最近、大腸発酵によるH₂が脂肪組織の炎症性サイトカインを減少させることを見出しました。今後は炎症に関係する脂肪組織中リンパ

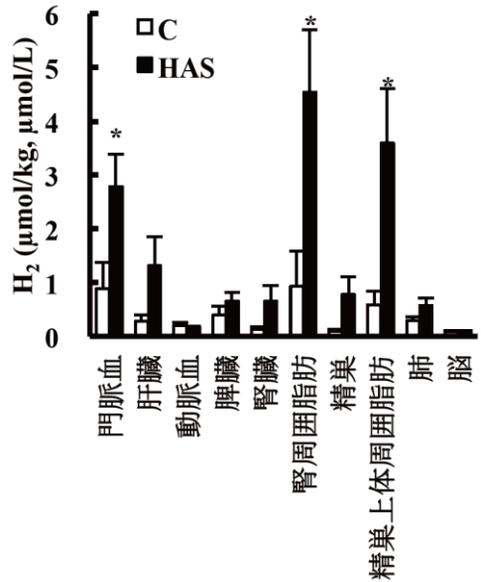


図1. C食およびHAS食を投与したラットにおける各組織のH₂濃度

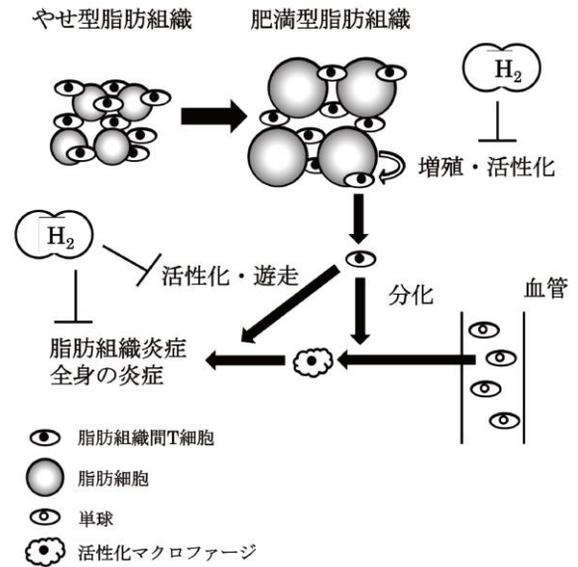


図2. 脂肪組織間T細胞およびマクロファージの活性化を阻害するH₂

球の分析、培養脂肪細胞による解析などを通して、H₂-脂肪組織-炎症の関係を解明していきます。

- 関連する科学研究費補助金
平成26~27年度 若手研究 (B)「CD8陽性T細胞を介した大腸発酵水素の抗炎症作用」
平成23年度飯島記念食品科学振興財団学術研究助成金
平成23年度ノーステック財団若手研究人材・ネットワーク育成補助金

平成26年度 科学研究費補助金 獲得一覧 (田邊助教と結城教授獲得分を除く)

西村直道 (栄養学科: 教授) : 大腸水素によるメタボリックシンドローム抑制の新戦略創生 (挑戦的萌芽研究)

山本達朗 (栄養学科: 講師) : 脳の発生および発達を制御する脂質栄養の機能解析 (基盤研究 (C))

小野寺理佳 (社会福祉学科: 教授) : ステップファミリーにおける孫と祖父母の関係に関する実証的研究 (基盤研究 (C))

瀬戸口 裕二 (社会福祉学科: 教授) : 小学校入学初期における認知促進プログラムの開発と検証 (基盤研究 (C))

空間的治療効果を重視した精神科病棟療養環境モデルの開発

—眺望-隠れ場理論の活用

保健福祉学部 看護学科

教授
結城 佳子



研究の背景

精神科病院や地域における看護・教育実践を通して、患者の病状に生活空間が与える影響を経験的に感じていました。しかし、その影響を実証することは困難でした。2013年度から札幌市立大学看護学部・デザイン学部連携による共同研究プロジェクトに関与し、空間デザイン学が人間と空間との関係性を追究するものであり、空間構築を通して人間の認知に働きかけ、能動的变化をもたらすものであることを実感しました。空間デザイン学的観点、特に眺望-隠れ場理論を組み入れて精神科病棟の療養環境を構築することによって、入院患者にとって高い治療的効果が得られることを確信し、本研究の着想に至りました。

空間デザイン学などで活用される眺望-隠れ場理論¹⁾は、動物行動学的観点から人間が心地よいと感じる風景について論じ、自分の身体を他者の視線から隠すことが風景に対する認識にもたらす効果を説明しています。この理論を活用した空間構築により、患者が他者の視線や存在と適度な心理的距離を保つことによって精神的安寧が得られ、健康的な意欲、感情や他者との関係性を引き出すことができ、療養環境への認識に肯定的な変化が期待されます。

1) ジェイ・アプルトン、菅野弘久訳：風景の経験 景観の美について、法政大学出版局、2005

研究の概要

本研究の目的は、精神科病棟を対象に空間的治療効果を重視した療養環境モデルを開発することです。J.アプルトンの眺望-隠れ場理論を中核に据え、精神科入院加療を要する患者に対して高い治療的効果を有する空間が具備すべき要件を、看護学および空間デザイン学的観点から抽出します。抽出した要件に基づき、療養環境モデルの理論的枠組みを構築し、精神科病棟における治療的空間を構想・設計し、実際の精神科病棟に実現し、その治療的効果を分析、療養環境モデルの妥当性を検証します。

空間デザイン学的理論や観点と看護学的観点との融合により、患者の安全を保障する開放的な空間を原則としつつ、治療的効果をもたらす空間構築の実現を試み、さら

に、治療的効果を有する精神科病棟における療養環境モデルの構築に挑戦します。

今後の展望

看護学と融合可能な空間デザイン学における理論として、眺望-隠れ場理論に加え、E.ホール²⁾の人の距離感に関する理論の活用も想定しています。これらの理論を活用する可能性を提示した研究分担者（空間デザイン学）は、抜本的改修に頼ることなく既存空間を再強調（re-intensify）する手法に長けています。また、一級建築士資格を持つ建築家であると同時に、環境芸術作品の制作等を通して、人間の意識を覚醒し、現実空間と人々の意識とを接合する方法を探求し続けています。このような研究者と連携することにより、新たな着想による療養環境の実現および関連理論の発展が期待できます。また、空間的治療的効果を検証する方法として、看護学およびデザイン学各領域の研究に広く採用されているクリッペンドルフ³⁾⁴⁾の内容分析とデザイン学領域で採用されている感性工学的手法を複合的に活用します。看護学とデザイン学の連携により得られる成果物の分析・評価に新たな方法論を提案できると考えています。

残念ながら、現時点では十分な成果を得られているとは言えませんが、最終的には一事例にとどまることなく、精神科病棟における治療的効果を有する療養環境モデルを提示することを検討しています。

- 2) エドワード・ホール、日高敏隆・佐藤信行訳：かくれた次元、みすず書房、2000
- 3) クリッペンドルフ、三上俊治ら訳：メッセージ分析の技法 内容分析への招待、勁草書房、1989
- 4) クリッペンドルフ、小林昭世ら訳：意味論的転回 デザインの新しい基礎理論、エスアイビー・アクセス、2009



写真：看護研究（4年必修科目）を指導した学生と

吉中季子（社会福祉学科：准教授）：DV被害者に対する自立支援策の展開に関する研究（基盤研究（C））

江連崇（社会福祉学科：助教）：近代日本における更生保護思想史研究（若手研究（B））

石川貴彦（教養教育部：准教授）機能追加と機能分割によるLMS開発サイクルモデルの構築（若手研究（B））

関朋昭（教養教育部：准教授）：21世紀の学校運動部活動の在り方に関する探求（基盤研究C）

清水池義治（教養教育部：准教授）：地理的表示制度における生産者組織を通じた地域空間ブランド・エクイティの向上（若手研究（B））

キャンパスライフ

サークル紹介 名寄市立大学吹奏楽団

名寄で音楽をやろう！！

皆さんこんにちは！名寄市立大学吹奏楽団です。当団は「音楽で名寄を活性化させたい」という強い気持ちを持った有志たちによって平成19年に創立されました。最初は練習場所の確保や、楽器や必要な道具を近隣団体から借用するところから始まり、現在の活動に至っています。

現在は約30名が所属しており、週に2日の合奏日を定めて、定期演奏会やコンクールでの団体演奏から地域イベントや市内ショッピングセンターでのアンサンブル演奏等さまざまな場で活動しています。当団のブログとTwitterに活動の様子を載せているのでぜひご覧になってください。

一昨年からは団体コンクールに出場しています。昨年は名寄地区代表として全道大会に進み、大学C編成の部で銀賞を頂きました。それぞれ試験や実習やアルバイトがありましたが、限られた時間の中で皆で一つの曲を作り上げる喜びを感じることができ、本番はとても楽しく演奏することができました。

また、昨年市民会館で行った定期演奏会では本番の数か月前から準備を始め、演奏以外でもお客さんに楽しんで頂けるよう劇や合唱を取り入れました。さまざまな年齢層の方に来て頂き、少しずつではありますが、名寄の皆さんに私たちの活動が認知されていると感じました。

吹奏楽は中学校や高校の部活として多くの学校で行われており、名寄市立大学にも多くの経験者がいます。50、60名以上の部活で活動していた人にとっては、現在の当団の人数はとてま少なく感じます。さらに大きく異なるのは、企画、運営、演奏を学生主体で行うということです。今まであたりまえのように先生や学校にしてもらっていたことを自分たちでやることで、一つの演奏会を行うまでにどれだけのことが必要なかを学ぶことができます。また、集団で一つのものを作り上げるということは、少ない人数だからこそ一人一人の役割が大きく、必要な存在であることが分かります。

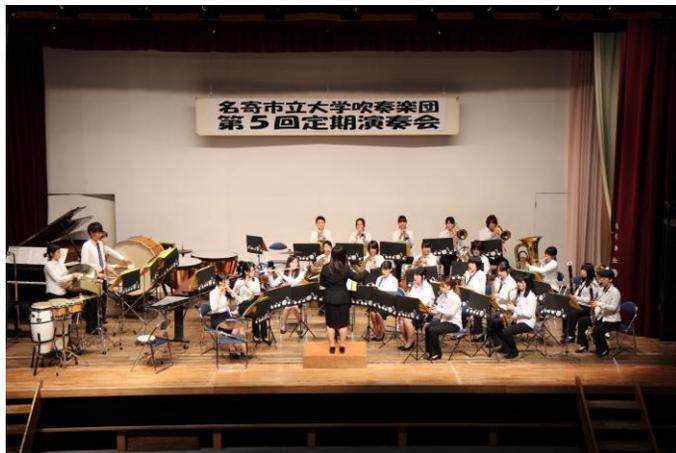
こうして学生主体で活動を進めていくと団員との結びつきがとてま強くなり、学年学科問わず活動以外でも交友関係を築くことができます。演奏活動だけではない楽しさも味わうことができます。

大学バンドだからこそ経験できること、味わえることがここにはたくさんあります。ほかのサークルと掛け持ちをしている人もアルバイトをしている人も大学から楽器を始めた人もいます。「吹奏楽が好き」、「楽器が好き」な人はもちろん、「皆で一つのものを作り上げるのが好き」という人もぜひ、私たちと一緒に音楽をやきましょう！

ブログ：<http://meidaiwindmusic.blog.fc2.com/>



名寄市立大学吹奏楽団
繁泉佳苗
北海道滝川高等学校出身
栄養学科4年



定期演奏会の様子

<SOサークル>

- ・SO日本夏季ナショナルゲーム・福岡
福岡県（スペシャルオリンピックス全国大会）
（2014年11月1-3日）
阿部友香・菅原瑞代・三浦夏実（社会福祉2年）
- ・札幌ボーリング交流会（道内SO関係者交流会）
札幌市（2014年11月28日）
池本和人・阿部友香・菅原瑞代・鷹嘴陽香（社会福祉2年）伊藤麻里・森田真美（社会福祉4年）
- ・SO日本 北海道・東北ブロック冬季雪上協議会
札幌市 2014年2月28日～3月1日
池本和人・阿部友香・菅原瑞代（社会福祉2年）
森田真美（社会福祉4年）



SOサークル

<スポーツチャンバラサークル>

- ・第20回札幌市スポーツチャンバラ選手権大会
札幌市（2014年10月5日）
野中紀鷹（栄養学科2年）
小太刀初段・二段の部 優勝
長剣初段・二段の部 準優勝
異種初段・二段の部 準優勝
檜山仁士（社会福祉学科1年）
異種一般・無級の部（新人の部） 準優勝
中野正太（社会福祉1年）
長剣一般・無級の部（新人の部） 4位
- ・スポーツチャンバラ全国学生大会
東京大学駒場キャンパス（2014年10月12日）
野中紀鷹（栄養学科2年）
有段楯小太刀の部 ベスト8
金澤雄大（栄養学科2年）
新人短刀の部 ベスト8
- ・スポーツチャンバラ東京都大会
西東京市総合体育館（2015年3月8日）
野中紀鷹（栄養学科2年）
一般楯小太刀 優勝
有段小太刀 敢闘賞
有段基本動作 敢闘賞



スポーツチャンバラサークル

<手話サークル>

- ・第9回全国手話検定試験（2014年10月12日・18日）
準1級合格者
村上李奈 小幡彩華 城生舞 藤原由実 越前紗文
（以上5名社会福祉学科3年）
2級合格者
阿部友香 小野崎唯奈 高橋万葉 深田緑 前田鈴奈
森美里（以上6名社会福祉学科2年）
3級合格者
新村奈生 泉佳奈枝 安藤友香 佐藤咲 梶谷萌
信夫梨花 三原里奈 林川恵美
（以上8名社会福祉学科1年）



手話サークル

NCU Information

卒業論文の発表会・報告会、卒業公演が行われました

2014年度卒業生の締めくくりとして、保健福祉学部3学科に関しては卒業論文の発表会・報告会、短期大学部児童学科では卒業公演が行われました。卒業論文の発表においては、口頭発表、ポスター発表など形式は様々でしたが、この1年間取り組んできたテーマについてスライドやポスターに工夫を凝らして教員や学生にわかりやすく伝えていました。また、卒業公演は市民の方もお招きし、すばらしい演劇を披露しました。



栄養学科卒業論文発表会 (2014年12月19日・20日)



社会福祉学科卒業研究報告会 (2015年2月13日)



児童学科卒業公演 (2015年2月15日)



看護学科卒業研究報告会 (2015年3月3日)

卒業証書・学位記授与式が挙行されました(2015年3月17日)

平成26年度名寄市立大学・短期大学部卒業証書・学位記授与式が挙行されました。卒業生185名(保健福祉学部137名、短期大学部48名)が、名寄市立大学・短期大学部を卒業し、社会人としての一步を踏み出しました。



編集後記：名寄は、雪深い冬が終わり、草花の芽吹く春を迎えようとしています。Web広報誌も、第1号発刊から半年が経過し、第2号を発刊するに至りました。季節の移り変わりの早さを感じます。この間、名寄市立大学では、短期大学部の募集停止が行われ、28年度開設を目指して「社会保育学科」の設置に向けた準備が始まりました。このような大学の再編そして強化を念頭におきながら、Web広報誌第2号では、前旭山動物園園長の小菅正夫氏をお招きし、動物の話を交えながら「保育」の重要性について語っていただきました。また学長と学生の対談も実施し、今後の本学が目指すビジョンや学生に求めるミッションについて話していただきました。これからも本学の様子を届ける重要なツールとしてWeb広報誌の充実に努めていきたいと思ひます。

名寄市立大学広報Web委員会 山本達朗

< 広報Web委員会 >
西村直道
村上正和
忍正人
傳馬淳一郎
MEADOWS Martin
山本達朗

2015年4月1日 発刊